飼料学(52)

誌名	畜産の研究 = Animal-husbandry
ISSN	00093874
著者名	熊倉,克元 石橋,晃
発行元	養賢堂
巻/号	62巻10号
掲載ページ	p. 1092-1100
発行年月	2008年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

飼料学（52）

飼料—飼料関連の字義，種類および法律　I 飼料関連の字義

熊倉克元*・石橋　晃**

人と動物と飼料との係わり合いは人が動物を飼うことを始めたときから始まったと考えられる。人と家畜との付き合いは遺跡に見られるように動物種によって異なるが極めて古い。家畜は最初は友であり，それから利用価値が見出されて祭祀に使われたり，食用となり，労役に使われるようになり，戦力になっていった。動物に餌をやるようになると動物は何が好きかから始まり，成長や繁殖には何がよいかということを観察や経験から学んだと思われる。中国では陶朱公が戦国時代に畜産で財を成したことが書かれており，日本では平安時代に犬養部とか猪飼部とか言う姓があるようにすでに平安時代には職業として動物を飼うこと始まっていた。そのとき飼料をどう表現してきたのかについては考察したい。

1 飼料を表す言葉

現在，餌に関係のある漢字には飼料，餌，餌料，秣，糧秣，飼い葉などが当てはめられている。いずれも食編がついている。英語でも餌に関係のある言葉は多様である。

動物の食べ物は日常的には飼料をやったというよりは餌をやったと餌の方が多く使われ，餌代，飼料代という時は混用されている。飼料工業とはいうが餌工業とはいわないで微妙に使い分けている。飼料と餌料とは最近までは使い分けられていた。本来，飼料とは一種以上の栄養素を含み，家畜に経口的に栄養素を補給するものである。餌料は養殖魚介類に与える食物を呼ぶ習慣があったが，配合飼料の普及とともに，自然界に存在するものを餌料（天然飼料）と呼ばれるようになった。魚の養殖に使われる鰯やこうなごなどは生餌（なまえ）と呼び，種苗に与える輪虫やアルテミアなどのプランクトン類は生物餌料と呼んでいる。秣は牛馬に与える草の類である。

表1　飼料に関係のある英語

aliment	栄養物
diet	栄養価などから考えた食物(food), 治療，体重調節目的の特定食，規定食。
feed	特に家畜の飼料(food, fodder)，牧草の一回分。
fodder	家畜の飼い葉, 秣 (まぐさ)
food	飲み物に対して食物，動植物が摂取する栄養分
meal	1日中定時の食事（repast)，一回の食べ物，一食分
nourishment	栄養物
ration	与えられる食物の定量，軍での一日分の食料。

配合飼料とそれを作るために使われた飼料原料とは区別されるが，同じものであることもある。例えば馬にえん麦だけしか与えないときはえん麦は飼料であり，草やその他のものと一緒に与えるときは飼料原料である。餌には量的，質的概念が含まれるが，飼料にも飼料原料にも量的，質的な概念は希薄である。量的な概念を表すためには英語の ration に当たる飼料日量，飼料の一日量という語が用いられる。日本語に比べると英語にはより量的な概念が含まれている。

食料 food と飼料，餌 feed というように人の食べ物と家畜の食べ物とは区別されてきた。一方で伴侶動物，ペットの食べ物は世界的に飼料とはいわずフード food という言葉を用いている。

1)飼の由来

飼は音で「シ」，訓で「かウ」。漢字としての成り立ちは，いわゆる「形声」で，偏の「食」と旁の「司」（音はシ，つかさどる）からなる。したがって司のもとの意味とは関わりはない。集韻に「飤，説文に，糧なり，或ひは司に従ふ」とあり，飼は「飤」と同じく食料としての「かて」の意味がある。また増韻に「飲，食を以て人を食（やしな）ふなり」とあるように，食料を与え，やしなうの意がある。また，素問至眞要大論には，「甘を以て之を飼ふ。」とあり，その注に，「飼，己食するを曰ふ，他に飼ふを曰ふ」とあるように飼は，食料としての「かて」或いは「めし」の意の他に「かふ」「やしなふ」の意を持つ。さらに玉篇に，「飤，食なり，飼と同じ」とあるように飼は，飤（音はシ，或い

*栃木県立真岡北陵高等学校(Yosimoto Kumakura)
** (社) 日本科学飼料協会(Teru Ishibashi)

0369-5247/08/¥500/1 論文/JCLS

はジ）と共通した意味を持つようである。

ただ，「飤」は成り立ちの上では，いわゆる会意で，「食と人との合字」であることから，「人の食うべきもの，人をやしなうもの」（大漢和辞典）の意となる。増韻にも「飤，食を以て人を食（やしな）ふなり」とある。

これに対し，飼は「人をやしなうもの」の意のみならず「動物に餌（えさ）を与え養う」（大漢和辞典）の意に用いられる。したがって，飼料とは「動物を飼うえさ」（大漢和辞典）のことである。この語のいわば名詞化した形の「かひ（飼ひ）」については，以下のかいば（飼い葉）について の項を参照されたい。

2)餌の由来

餌は音で「ジ」または「ニ」。会意兼形声である。一般に「えさ」の訓を充てているが，いわゆる常用漢字音訓表には，「えさ」の訓読みは行われておらず大漢和辞典にもない。大漢和では，①こなもち，だんご，②こながき，③たべる，④たべもの，ゑじき，ゑさ　と並ぶ。これらの語義のうち④については，玉篇に，「餌，食なり」とあり，また一切経音義，九に「餌，食なり，案ずるに，凡そ食する所の物，皆餌と曰ふなり」とあるように，食物全体を広く指す言い方のようである。これに対して，釋文に「餌，魚餌也」とあるのは，いわゆる「鉤餌」（つりえさ）のことで，限られた意味ということになる。

また，正字通に「餌，陰に利を以て人を誘ひ，また餌を与えるを曰う。」とあるように，「餌を食らわす。餌を与える。」の意をもつ。

3)秣の由来

秣には①まぐさ，かいばおよび②かうの二系統の意味があり，①は「バツ，マチ」の音，②は「バイ，メ」の音を当てる。成り立ちは形声。旁の「末」には，「細かなもの」の意がある。

①は，正字通に「秣，馬を食（やしな）ふ稭なり」とあるように，馬を飼育するための穀物類であったようである。稭とは，「みご，みごわら，皮を去ったわら」（大漢和辞典）のことである。「みご」とは，主に東北，関東地方においては，稲の穂の芯，またはわらの皮を取り去った上部の茎のことである。つまり，「わらしべ」のことである。漢字として「藁稭」を当てる。したがって，「稭」は「しべ」と訓読され，「藁の穂のしん」（広辞苑）のことである。また，詩経の毛傳には，「秣，粟なり」とある。粟は，稲，きびなどの外皮のついたままのものを指し，穀物の総称である。大漢和辞典にも，「こくもつの實，たなつ物，きび，こめ，あは等の総称。」とある。ここで「たなつ物」とは，「タナ」すなわち「種（たね）」ものの稲または穀物の総称である。また，字彙には，「秣，穀粟を以て馬を養ひ，馬に秣（まぐさか）ふを曰ふ。」とあるように，まぐさで馬などの家畜を飼育する意もある。古代中国では，すでに詩経に「之（こ）の子ここに歸（とつ）ぐ　ここにその駒に秣（まぐさか）ふ」の句がある。

②は集韻に「秣，飼なり」とあるように，「動物に餌（えさ）を与え養う」ことである。つまり，①の動詞化した形である。

4)芻の由来

大漢和辞典によれば，音は「ス」，「シウ」または「シュ」で慣用的には，「スウ」と読む。また，「かりくさ」「まぐさ」「まぐさかふ」「くさかり」などの意を当てる。「芻」は象形の文字で大漢和の字解にも「刈り取って束ねた草の形に象る。勹は包にて束ねるさま。屮はくさ。本義は，かりくさ。転じて，刈ってほしたまぐさ，又，それを食ふ禽畜の類などの意に用ひる。」とある。これは，説文の「芻，艸を刈るなり。束艸を包むの形に象る。」や，玉篇の「芻，茭なり。」という解釈に拠ったものと思われる。さらに，揚雄，長楊賦に「芻蕘を蹂踐す」とあり，その李善注に「善曰く，芻，馬草なり。」とあること，また，大戴禮記に「宗廟芻豢と曰ふ」とあり，その注に「牛羊を豢と曰ふ」と解説されていることに準じたものと思われる。

また，字訓によれば「卜文の字形は，又（ゆう）（手）中に両屮（てつ）を挟む形に作り，草を刈り，まぐさかう形。」と説明される。説文解字によれば「刈りたる艸（くさ）なり。艸を包束するの形に象（かたど）る。」とあり，これは，草の形（屮）をつつんでしばる（勹）ことを表し，草の束を二つ重ねて，ぐっと縮めて束ねた形である。また，白川静氏によれば「字はもと包に従う形ではなく，手の指を広げて，草をもつ形。」であるとする。詩経に「生芻一束」とあるのは，神に捧げるものであったという。若草や秀枝（ほつえ＝枝先の新芽）を摘んで神に供える神事が字の由来であり，のちに「まぐさ」の意味に転用されるようになったものであろう。字

訓においても，老子第五章の「天地は不仁，萬物を以て芻狗と爲す。聖人は不仁，百姓を以て芻狗と爲す。」を引き，芻とは神に供するものとしている。また先に引用した楊雄，長楊賦中の芻蕘（すじょう）という語は，牧草や薪を採る人すなわち采草，采薪の人のことという。「采草・采薪」は，神事に用いるものとして詩経でもその習慣やならわしを詠ったものが多いという。

5)**かいば（飼い葉）**

大漢和辞典を始めとして，多くの辞書が，「かいば」に「飼い葉」の字を当てている。広辞苑にも，「飼葉＝牛・馬の飼料とする乾草など。まぐさ」とある。また，日本国語大辞典（小学館）では，「飼葉＝牛馬の飼料とするわらや草。まぐさ。」とある。

一般に「かいば」ないしは「まぐさ」の材料とされるのは，藁，ふすま（麩＝小麦をひいて粉にしたときに残る皮の屑），草などである。勿論，これには時代や地域による相違はある。しかし，基本的にはかいばの材料としてのわらや雑穀類の外皮，牧草類という構成はあまり変わらない。

ここで少し疑問に思われるのは，「飼い葉」の字を当てたときの「葉」である。「わらや草など」と「葉」とのイメージ的な違いを感ぜずにはいられない。そもそも，「かいば」にそれが用いられることがあるのだろうか。

日本語大辞典では，「かいば［飼い葉］牛や馬などの飼料とする草・乾草・わらなど。まぐさ fodder」とあり，また「まぐさ［秣］（馬草の意）牛馬のかいばとする草・わら　fodder」とある。また，言泉では，「かいば［飼い葉］牛馬の飼料とする藁や草。まぐさ。」「まぐさ［秣・馬草］（古くは「まくさ」）牛馬の飼料にする草。飼い葉。」とある。いずれも「かいば」や「まぐさ」は，「草」や「わら」であって，「葉」ではないのである。「葉」という字は，「平らかで薄いものをいふ」または，「扁平で小さいものの喩。」（大漢和辞典）とあり，本来，木々の葉のような薄く平たいものを指すと思われる。

ところが一方，日本国語大辞典によれは「かしわ」の葉のことを「かいば」ということがあるといい，また方言として「秋の間にこき落としてとっておく，飼料にする木の葉。」の意味で，青森県南部で使われているとある。その他「くず」（山口県大津郡，長崎県大村市）「かいばかずら」（山口県阿武郡）「ほおのき」（山口県豊浦郡）を指す言い方として用いられることがあるという。つまり，これは地域によりその使用のされ方に差異はあろうが，「かいば」には，幾種類かの草木の「葉」も使われうるということを示しているのではないだろうか。また，一方で「まぐさ」には，「まぐさば（秣葉）＝まぐさにする草の葉」（日本国語大辞典の語例があり，曾禰好忠（曾丹）の「まくさばのかぜだにさむくふかざらばみえこぬ人をうらみましやは」の歌をその用例として挙げている。この歌における「まくさば」には，「まぐさば＝秣場」つまりまぐさを刈る草生地つまり茅場という意味の可能性もあろうが，やはり「秣葉を枯らす冷たい風」の歌意に解釈すべきであろうと思われる。つまり，冬の寒さの来る前にかいばとして木々の枝からこき落としてとって置く木の葉の意味となろう。

ところで，上出の「まぐさば＝秣場」であるが，これは，江戸時代，飼料や肥料となる草を採取することを目的とした原野のことである。しかし，それが，日本大百科全書によれば，「田畑の肥草（刈敷・かりしき）」を採取する場も秣場と混同して称した。」とある。

江戸時代初期において，戦国戦乱の終結による軍馬の需要が減る一方，新田の開発などによる刈敷の需要は逆に増え，秣場はもっぱら刈敷を採取する場となった。そして秣場が刈敷採取の場となってもその名称は残ったという。ここで刈敷とは，広辞苑によれば，「山野の草・樹木の茎葉を緑のままで水田や畑に敷き込むこと。また，その材料。かつて地力維持の重要な手段の一」とある。つまり，「まくさば」には，草や樹木の茎葉が沢山存在したのである。ここにも，「まぐさ」と「葉」との接近を見ることができる。

ここで，さらに「かいば（飼い葉）」の語を「飼い」と「葉」に分けてその語義を検討したい。

大言海の記述では，「かひ（カイ）　名詞　飼　餌ノ字ヲ書クハ，餌ナリ，省キテ，甘トモ書ク，牛甘（ウシカヒ）猪甘（ヰカヒ）飼フコト。動物ニ食ハスル食。餌。」とある。

嬉遊笑覧十二では「漁夫，鰹ナド釣ルニ鰺ヲ用レバあぢ飼ト云ヒ，鰯ヲ用レバいわし飼ト云フ」「馬ニかひヲツケル」とある。つまり，「飼い」とは，「動物ニ食ハスル食」なのであり，牛に食わするも

のならば「うしかい」なのである。因みに，この語の動詞化した形が「かふ（飼ふ）」である。

さらに，大漢和辞典の「葉」をみると，「は。草木のは。」とあり，説文の「葉，艸木の葉なり，艸に従ひ　聲なり。」を引用している。つまり，「葉」には「木の葉」「草の葉」の両様の意味があるのである。したがって，「かいば」とは，「動物ニ食ハスル食」としての「草木のは」の意となろう。

そこで，飼い葉の「葉」とは，「艸木の葉」のうち，特に草の葉を意識したものと思われるが，上述したようにその使用される時代や，地域によっては「木の葉」の意にも用いられているものと思われる。「かいば」に「飼い葉」の字を充てるのは，以上のような理由によるものと思われる。

「葉」の文字の持つ本来の義を考慮するならば，この文字が，広く慣用的に使用されていることに多少の疑念を抱かないわけにはいかないが，「葉＝草木の葉＝牧草や木々の葉」と意味上の連鎖が成立するならば，「かいば」には，「牛馬を飼いやしなうための牧草類や木の葉類」の意として「葉」の文字が当てられているものと思われる。

2 イネ科の飼料原料の字義

1)穀　grain ，corn

穀物という熟語の「穀」の成り立ちと字義について，考察したい。穀は形声。旧字は穀に作る。最初の形は，穀物の穂を撃って脱穀をしている形である。それが脱穀されて中が空になったものが殼である。因みに殻（殻＝から）は，脱穀後くずのようなものが中に残っている形だという（白川　静　常用字解）。その殻に禾（か＝稲・穀類）が入っているものが穀である。同辞典によれば，「穀物類は人命を保つものであることから『やしなう・いきる』の意味に用いる」とある。次に，大漢和辞典によれば，「穀」とは，「①たなつもの。百穀の総名，②食物，③よい，よくする。④やしなふ。⑤いきる，⑥ふち。さいはひ」などとある。①のたなつものとは，タナつまり種（たね）のものの意で，稲または穀類の総称である。また⑥のふちは，禄すなわち天からの恵みのことである。ここで着目されるのは，①②の具体性から③④⑤の抽象性へと拡がり，⑥では両性質を融合させた意味となっていることである。つまりこの文字が，穀物や食物といった，直接的にものを指す言い方から，④やしなふ，⑤いきるといった抽象性を帯びた意味まで広く用いられていることである。ここに，人間の生活を物質的な面より維持するところの，換言すれば社会の下部構造を支えるものとしての「穀」の字義の重さを感ぜざるを得ない。それは，人間の生存そのものと密接に繋がっていることだからである。例えば，⑤いきるでは，詩経の「穀（い）きては則ち室を異にするも　死しては則ち穴を同じうせん」の切たる愛情を詠った詩句が引用されている。今日，この文字の持つこうしたニュアンスは，宗教観などに残されている以外は，殆ど自覚されることなく使用されていると言ってよいであろう。言葉の源流に遡ることの意味深さを痛感する。

2)稲（稲）rice *Olyza sativa* と小麦　wheat *Triticum spelta L.*

稲と麦とは同じイネ科に属する穀物である。現在イネの栽培種としての分類としては，サチバ種とグラベリマ種の2種がある。嘗てわが国に将来されたサチバ種には，籾の形状により日本型，インド型，ジャワ型の3種がある。また，栽培地によって水稲，陸稲の分け方がある。さらに成熟の遅速によって早稲，中稲，晩稲に，澱粉の性質によって粳（うるち），糯（もち）に分ける。一方，麦も，幾種類かの麦の総称となっており，大麦，小麦，裸麦，ライムギ，えん麦などがある。生物学的に同じ系統にあり，その穀実を食し，その実の一部や茎などを，家畜の飼料として利用するといった共通性を持ちながら，文字の上で，稲と麦というように異種的に分類される根拠は如何なるものなのだろうか。ここではそれを，主として語源的な見地から考察してみたい。

(1) 稲　その旧字は「稻」である。音は「とう（たう）」。旁の舀は，臼のなかのものを掬いとるようすを表す。『説文』によれば，「舀（もちいね）なり」とある。この「稻」も総称で，同書に「凡そ粘る者粘らざる者，統べて之を稻と曰ふ。古は則ち粘る者を以て稻と曰ひ，粘らざる者を秔（こう）と曰ふ」とあるように，当時総称して稻といっているものを，さらに古くは粘りのあるものを稻，ないものを秔と言っていたことがわかる。また，金文の蘀（ほ）の銘文に「用（もつ）て稻粱（たうりやう）を盛る」とあるように蘀に盛って神饌としたという。神饌とは，神に供える飲食物で，稲，米，酒，鳥獣，魚介，

蔬菜，塩，水などであるが，この中で，米が主たるものとなっていることがわかる。中国や日本などの農耕型社会における，穀物としての米のステータスの高さを思わざるを得ない。

(2) 麦　この字は会意で，もとの字は，來（来）と夂（すい）とを合わせた形である。麦踏みをする様子を表したものとされ，來は麦の形，夂は止（あしあと＝趾）を逆にしたものとされる（白川静　常用字解）。説文には，「芒＝ぼう（麦などの実の殻にある堅い毛。のぎ）のある穀なり。秋に橦（植）ゑて厚く薶（つちかけ）す」とあり，夂は，この土かけする動作，つまり蒔いた種に土をかけて足で踏むようすを表したものと思われる。また同じく説文に「麥は金なり。金王（秋）のときにして生れ，火王（夏）のときにして死す。」とあるのは，秋播夏収の農事に準えつつ五行説によって説いたものである。稲の場合は，言うまでもなく，詩経に「十月，稲を穫る」とあるように旧暦十月の秋ないし冬に収穫をする訳である。農耕型社会の古代中国にあっては，穀物は自然科学的分析による分類でなく，農作業，農事に結びつけて行われるのが自然であったろうと思われる。同じ穀物ながら，その収穫時期の相違，臼で撞いて粘度を高め，餅とすることが可能か否か，供物としてのステータスシンボル的意味の有無などを根拠として，日常生活や神事に直結した次元でネーミング，文字の創造が行われたと考えられるのである。

こうしてみると，こうした名付け方や文字の表し方に，現代的視点から言って非合理性を感じるのは，半ば当然のことと言えよう。文字の誕生した当時と現代との社会的背景や価値観の決定的間隔が存在するからである。社会の日常的習慣や価値観の中に意味を持ち，存在意義を有してこそ，言葉や文字は生きる命を与えられるのであろう。しかし，そうした古代人の価値観に現代科学の光を当てることは，そうした古代的価値観を排斥するのではなく，むしろ現代のそれとの共存を図っていくことにより豊饒で二元的な価値世界を生み出す可能性を持つということなのではなかろうか。

3) トウモロコシ（玉蜀黍，英 maize，米　corn）*Zea mays*

トウモロコシは漢名で玉蜀黍と書く。この3文字から成る穀物について説明するのに次の3種類の穀物について語らなければならない。

和　名	漢　名	英　語	学　名
① キビ	黍	millet	*Panicum miliaceum*
② モロコシ	蜀黍	sorghum	*Sorghum bicolor*
③ トウモロコシ	玉蜀黍	corn(米), maize(英)	*Zea mays*

まず，①の黍は音はショ，訓が「きび」である。これはイネ科の一年草で，原産地は東アジアから中央アジアの温帯である。新石器時代よりアジア，ヨーロッパ一帯で栽培され，中国では，五穀の一つとして重要視された。わが国へは，弥生時代に伝来したといわれる。黍は，『説文』によれば「禾の属にして黏(ねばり)あるものなり。大暑を以て種(う)う。故にこれを黍と謂ふ。禾に従うて雨の省聲なり」とある。「禾の属」とは，今日で言えばイネ科の穀物類に相当し，また一方，卜文の字形では，禾と水とに従う。つまり黍の字は，説文では「禾と雨」により成り立つとするのに対し，卜文に見られる字形では，「禾と水」から成るというのである。つまり，黍は，「禾（イネ科の作物）＋水または雨」という構成の会意文字である。これは，水や雨など水気を吸収して育つ作物を表す。また，暑（ショ）と同系で，暑いさなかに成長するさまを表すとの説もある。また，この「禾と水」の組み合わせは，けだし酒を醸造することでもあろう。黍の粘りあるものは，醸造に適するのである。中国の高粱酒がこれに相当するものである。また，万葉集にも「古人の食（たま）へしめたる吉備能酒 」の歌があり，古代のわが国においても黍から酒を造っていたことが窺える。

アジアを原産とする黍が栽培されていた中国に，新たな栽培種がもたらされた。それが②蜀黍（ショクショ＝モロコシ）である。この，アフリカを原産とするイネ科の一年草は，中央アフリカで古代より栽培されていたという。アジア地域には，紀元前に伝わり，4世紀頃中国に入ったといわれる。それに，蜀黍の名が冠せられたのは何故か。この蜀は，国名ないしは地域名としての蜀である。現在の四川省を中心とし，劉備が蜀漢を建国したのをはじめ，いくたびかの歴史的変遷を経てきた地域である。蜀は古くから地味豊かな土地で，独自の植生が見られ，また特産的な作物にも恵まれている。例えば，蜀葵（ショクキ＝カラアオイ），蜀桑（ショクソウ＝フジモドキ），蜀椒（ショクショウ＝ナルハジカミ）

などが挙げられる。また，蜀茶（ショクチャ）といえば蜀から産する茶ないしは椿のことである。蜀黍は4世紀頃に伝わったと書いたが，当初中国のどこにもたらされたのか，この蜀黍という呼称は，それが蜀すなわち現在の四川省に伝播し，そこから中国全土に広まったということを物語るものではないか。蜀の地が古来西域からのさまざまな文化や文物の受け入れ地となった例は少なくないからである。

大漢和辞典によれば，この蜀黍を「北地では高粱といふ」とある。蜀にもたらされた蜀黍が，やがて全土に広まり，地域による呼称の相違も生まれたようである。現在日本でも，これを「コーリャン」ないしは「カオリャン」とも呼び習わしているのは中国語の発音に倣ったものである（gaoliang）。この蜀黍が広く普及していったのは，言うまでもなく農耕を主とする当時の社会において，蜀黍が，「蜀黍，北地に之を種う。以て缺糧に備ふ」と本草綱目が記すように，缺糧すなわち食糧不足に備えておく穀物として貴重であったからである。

最後に③玉蜀黍である。大漢和辞典の「本草綱目」記事の引用によれば，玉蜀黍について，「釋名に，玉高粱なり，集解に，時珍曰く，玉蜀黍種西土より出で種は亦た罕なり，其の苗葉倶に蜀黍に似る，而して肥矮なり」とある。これによれば玉蜀黍は，玉高粱とも云い，西域よりもたらされた珍しい種で，その苗や葉は，蜀黍に似ているが，太く背丈の低いものだということになる。この米大陸熱帯の原産といわれる玉蜀黍は，少なくとも数千年前には栽培化され，南北米大陸に広まっていたと言われる。それが世界に普及するきっかけとなったのは，1492年コロンブスが種子をスペインに持ち帰ってからである。その後わずか30年で全欧に広まり，16世紀初期にはインドや中国へも伝播された。

そして，この新来の栽培種が「其の苗葉倶に蜀黍に似る」ということにより，「蜀黍」に「玉」が冠せられたのである。その際なぜ「玉」の文字が冠せられたのか。「玉」の辞書的な意味としては，①たま，美石の総称　②立派な，美しい（ほめ言葉，美称として）　などとある。玉蜀黍の「玉」はこのうち②の意味の系統であろう。今日，中国語ではトウモロコシは「玉米 yùmǐ」という。このうち，「玉」は①たま　②真っ白で美しいことのたとえ　の意味であり，「米」は①こめ　②（もみがらを取り去った）穀類　の意味である。とすると「玉」は，穀物類としてのトウモロコシの種子を中心とした美しさと，穀類としての優れた性質を表したものといえるであろう。南西の蜀の地に栽培が始まった，光合成の初期に炭素原子4個の化合物を産出し，光合成の効率の高い蜀黍が，同状況で炭素原子3個であるところの稲，小麦，大豆などといったいわゆる C_3 植物の，気象異変時などにおける不作を補うものとして，栽培地を拡げていった。「玉」には，その優秀なる栽培種としての玉蜀黍への称讃の意味合いが込められてはいまいか。

図1　トウモロコシの中国への伝播

以上黍，蜀黍，玉蜀黍と，いわゆる漢名に由来する意味について，中国への伝播を主に述べてきたが，それらは，わが国にはどのように伝えられたのであろうか。

まず，黍であるが，わが国には弥生時代の頃に伝えられ，栽培が行われていた。キビはきみ（黄実）の音転したものといわれる。さらに今日，方言として「キミ」「キンビ」「キン」「キンモジャ」などという形で残されている。ただし，その場合，後に伝わったモロコシやトウモロコシの意味で使われている場合も多い。黍のなかには，実に粘り気があり，餅にするのに適するものがある。これが「きびの米（もち）」である。また，万葉集にも「古人の食（たま）へしめたる吉備能酒」の歌があり，黍より酒を造っていたことが窺える。

このように黍は食用として，また醸造用として重要な穀物であった。現在の岡山県，高梁（たかはし）川流域にあった吉備の国は，黍をよく産することに国名の由来があると言う。

弥生時代の農耕生活のなかで行われ始めた黍の栽培であったが，やがて中国大陸からこの黍に似つつ，穀物としてさらに優れた特性を有するものがもたらされた。その時期であるが，遅くとも室町時代までには伝来していたとされる（万有百科大辞典）。それが蜀黍である。この，モロコシという呼び名で

あるが，これは，諸越（もろこし）つまり中国の越の国を訓読したものである。越の国とは，春秋時代の列国の一つとして紀元前6〜4世紀に浙江，江蘇などに勢力を持った国であるが，この地方は古くより日本との交易があり，越は浙江一帯の別称となっていたことから，昔日本では，中国を呼ぶ言い方として通用していたようである。万葉集にも「もろこしの遠き境に遣はされ…」の歌がある。また，中国から渡来した事物に冠して言う語でもあった。もろこし船，もろこし文字などモロコシは中国よりもたらされた代表的渡来物の一つであったのだろう。改正増補多識編（1670頃）によれば，「蜀黍，和名今按ずるに俗に多宇幾比と云ふ，増補に毛呂古志幾比」とあり，「たうきび」ないしは「もろこしきび」と呼ばれていたことがわかる。それが，「もろこしきび」，「とうきび」といった言い方のみならず，「もろこし」だけでも通用するようになったのであろう。後代の，「かぼちゃ」（カンボジア）「メリケン粉」（米国）などといった言い方と共通するものがある。モロコシは，その高さ1.5〜3m，古来の黍に対して，背が高いところからタカキビとも言った。ただし，近世になると呼び方に地域差が生まれ，物類称呼や本草綱目啓蒙によれば，東日本でモロコシ，近畿でトウキビ，四国でタカキビと呼んだほか，越後や中国地方で単にキビ，キミと言ったらしいが，現代の分布は必ずしもそのようになっておらず，キビ，キミを玉蜀黍の名称に使用する地域は他にある（日本国語大辞典）というように，蜀黍＝モロコシという画然たる区別は，絶対的ではないようである。ともあれ，この外来種に，「もち」と「うるち」の区別があり，その子実を粉末にして餅や団子をつくることにより，より豊かな穀物食文化が実現したのである。

やがて，15世紀から17世紀にかけてのいわゆる大航海時代を迎えるなかで，1492年コロンブスがその種子をスペインに持ち帰ったところのトウモロコシが，当時としては驚異的な早さで世界各地に普及する。わが国へそれをもたらしたのは，当時東南アジアへの植民地経営を推し進めていたポルトガル人であったとされる。本朝世事談綺（1733）の，「天正のはじめ，蛮舶持来る。関東にては，唐（タウ）もろこしといふ」の記述が，この経緯を物語っているが，これは，1579年（天正7）ポルトガル人が長崎に伝えたとされるものである。蛮舶すなわち西洋船舶のもたらしたものであったが，貿易品としては中国からの輸入品であったかも知れない。しかし，それにも「唐」の名が冠せられた。唐は中国の王朝名というより，中国その他海外から渡来したものに冠する語と言っていい。唐土船，唐土書，唐臼，唐箕など必ずしも海外渡来のもののみならず，一般と異なる形状のものに対して冠する語でもある。今で言えば，時の最先端技術やそれによって作り出されたものに対する感嘆風表現とでも言うべきか。要するにこのトウモロコシという呼称は，「もろこし（蜀黍）」の上に「とう（唐）」を冠したものである。モロコシも元来中国の意であるから，その上に唐をつけるのは自然ではない。これについては，その経緯を説明するいくつかの説がある。それを逐一取り上げることを省略するが，「先に日本に渡来したモロコシの語源が忘れられ，後に渡来した「玉蜀黍」が，「中国から伝わった蜀黍」として命名されたものか」という説や「トウモロコシという語形は，現代では関東を中心に分布しているが，その北隣にトウキビ系の語が，西隣にモロコシという語形が分布するので，この2語系の混淆とも考えられる（日本国語大辞典）といったところが妥当な説と思われる。しかし，諸説の中には「モロコシにあてる漢字が唐黍か蜀黍であるため，単純に重ねると『唐・唐黍』『唐・蜀黍』となってしまう。そこで『唐・唐』『唐・蜀』という重複を避け，『玉蜀黍』の用字にした（語源辞典　植物編）」などと説かれるものもあり，これは，漢名としての玉蜀黍を和名の範疇で考察している訳で，いささか妥当性を欠くものと言わざるを得ない。

在来物のなかではモロコシに最も類似し，いわゆるC_4植物として光合成の効率高く，稲，小麦，大豆などのいわゆるC_3植物と較べ，気候の異変に対しても強い，優秀な栽培種であるトウモロコシは，飢饉や飢えを救う貴重な作物であったはずである。「唐」の名が冠されたのは，そうした理由，つまり外来物として優れた栽培種であることへの賛嘆の意味合いを込めたものであったろうと思われる。

ただし，現在栽培されているトウモロコシは，明治初年に北海道開拓の人々がアメリカから改めて品種を導入し，以後全国にも広まったものである。これが，その後第二次世界大戦後の食糧難の時代ま

図2　トウモロコシの日本への伝播

で，食糧危機を救うものとして果たした役割は大きい。しかしその後，経済成長と食糧供給の安定化の中で栽培は激減している。

4) **稗**　Japanese barnyard millet *Echinochlos utilis*

音は，ハイ。訓読みとして「ひえ，ちいさい，いやしい」がある。大漢和辞典ではこれに音読みの「バイ，ヒ」を加える。「卑」を音符とする「形声」の成り立ちである。「卑」には，卑小の意がある（字統）。稗は主要作物としてのいわゆる五穀のなかに数えられるのだろうか。五穀とは，中国では周礼（しゅうらい）に「麻，黍（しょ），稷（しょく），麦，豆」をいうとある。しかしこれには諸説があり，一定しない。日本では一般に，五穀すなわち「いつつのたなつもの」とは，「米，麦，粟，豆，黍」を指すというが，これにも諸説があり，「稗」をここに入れるという説もある。わが国ではかつて山間部や痩せ地では主食として，平野部では主に救荒作物として栽培されていた。このことは，こうした稗の微妙な地位と関わりがあるのではないだろうか。

中国で五穀の中に数えられないというのは，説文に「禾（くわ）の別なり」とあることや，春秋左氏伝の杜預注に「草の穀に似たるもの」とあるのに拠る。こうした，五穀の中に入らず，一段と低い穀物としての稗であるが，その比喩性を表した語として「稗史（はいし）」なる語がある。稗史とは，古代中国で稗官（はいかん）が集めて記録した民間の物語である。後に転じて広く小説をいうようになった。段注によれば，小説を稗史というのは，「細小の義をとる」とある。これはつまり，「ちひさい，こまかい」という稗の形態的特徴を指したものと思われる。次に，徐灝の「段注箋」では，「自生在野」の意であるとする。この両者の義を総合すると，「官による正統な史書などではなく，民間にあって通俗的な，細小なる話を集めたもの」ということになろうか。大漢和辞典に「稗は細米，巷談の類は細碎の言であるからいふ。一説に民間の小説を野生の稗に比した語といふ」とあるのも同趣旨であろう。この稗史という語が，川端康成の伊豆の踊子の中に見える。

「踊子は十七くらゐに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結ってゐた。（中略）髪を豊かに誇張して描いた，稗史的な娘の絵姿のやうな感じだった。」

ここで稗史的なといっているのは，江戸時代の絵草紙などに登場するようなといったような意味あいである。大衆向けの流布本としての通俗絵本小説に出てくるような，古風ながら美しい姿のということなのであろう。

こうした，五穀に入らない一段劣った作物とされる稗であるが，わが国では，縄文時代に朝鮮半島を経てもたらされたといわれる。当時未だ稲の栽培は列島に行われておらず，稲に先行する形で栽培が行われたのであった。近年その栽培は殆ど行われなくなったが，いわば2000年に及ぶ農耕作物としての歴史を持つ栽培種なのである。わが国には，稗田と呼ばれる地名が各地に残存するが，これは山地のみならず平地においても稗の栽培が行われていたことを物語っている。よく分蘖し，生育も早い稗は様々な環境にもよく適応する。畑に作れば，畑稗，水田に作れば，田稗といった具合である。列島の山野の中に細やかな，変化に富んだ環境を持つわが国の風土において，稲作技術の伝播以後においても，飢饉を救う作物としてあるいは五穀などの主要作物の栽培不適地での作物として稗の持つ役割は少なくなかった筈である。中国において五穀の扱いを受けない稗のわが国における地位との微妙な相違は，おそらくこうした点に起因しているのではないだろうか。

参考文献

（引用されている出典中の文は書き下し文に改めた。）

集韻　11世紀，北宋の時代にできた韻書（発音引きの字書）。約5万字が収録されている。隋・唐代の音韻を知る基本資料といわれている。
増韻　五巻。宋の毛晃の撰による韻書。禮部韻略を増注したもの。さらに，その子の居正校勘重増した。
禮記　五経の一。周末から秦・漢時代の儒者の古礼に関する説を集めた書。周禮（しゅうらい），儀禮（ぎらい）とともに三禮（さんらい）と称される。
素問（そもん）中国最古の医書。24巻。秦，漢の頃に成立したとされるが，現存するのは唐の王冰（おうひょう）が注を賦したもの。
説文＝説文解字　中国最古の部首別字書。中国文字学の基本的古典。15巻。後漢の許慎撰。100～120年頃成る。漢字9,353字を540の部首に分類して掲げる。見出し字は篆文。六書の説により字形の成り立ちを説明。
詩経　五経の一。中国最古の詩集。孔子の編といわれる。殷から春秋時代までの三百余編の詩を，国風，雅，頌の三部門に大別し収めている。
正字通　中国の字書。12巻。明の張自烈著。清の廖文英が刊行。字彙に習った画引き字書。
字彙　中国の字書。12巻。明の梅膺祚（ばいようそ）の編。漢字を214の部首に分け画数によって配列。画引き字書の最初のもの。
玉篇　中国の字書。30巻。梁の顧野王撰。543年成る。約17,000の漢字を542の部に分類し，諸書を引用して音義を注したもの。古代の日本でも広く利用された。日本に一部伝存するが，原本は失われた。宋の陳彭年らが改編した「大広益会玉篇」を「玉篇」と略称することがある。
嬉遊笑覧　1830年北村信節（のぶよ）の随筆。12巻。付録1巻。部類を分け，和漢の書から特に近世の風俗習慣や歌舞音曲に関する事物を集めて考証したもの。

日本語の辞書

諸橋轍次，　大漢和辞典，大修館書店
新村出，　広辞苑，　岩波書店
日本大辞典刊行会，日本国語大辞典，　小学館，
白川　静，　字統，字訓，　平凡社
大槻文彦，大言海　，冨山房，
落合直文編，芳賀矢一増修，　言泉.

お知らせ

「飼料用アミノ酸研究会セミナー」のお知らせ

飼料用アミノ酸研究会（会員３社）は，11月18日（火）13：00～日本橋公会堂（東京都中央区）にて社団法人日本科学飼料協会にご後援をいただき「飼料用アミノ酸研究会セミナー」を開催いたします。

今回は新たな飼料用アミノ酸の需要を喚起する目的で，これから需要拡大が期待できる「水産飼料」，「ペットフード」におけるアミノ酸利用について，高知大学益本教授，九州大学古瀬教授にご講演いただくほか，会員会社から「健康食品」におけるアミノ酸の利用に関して情報提供を行い，動物栄養分野における新規用途展開の可能性について検討いただくための材料を提供したいと考えております。

セミナーの詳細と参加申込先は下記の通りです。

日時：平成20年11月18日（火）
13:00～16:00（12:30開場）
会場：日本橋公会堂ホール「日本橋劇場」
（東京都中央区日本橋蛎殻町1-31-1）
東京メトロ半蔵門線「水天宮前」駅，
6番出口，徒歩2分

演題：「健康食品におけるアミノ酸の利用」
（協和発酵バイオ株式会社：森下幸治氏）
「養魚飼料へのアミノ酸の添加」
（高知大学農学部：益本俊郎氏）
「ペットにおけるアミノ酸栄養」
（九州大学農学部：古瀬充宏氏）
座長：石橋　晃氏
社団法人日本科学飼料協会理事長
後援：社団法人日本科学飼料協会

参加申込は下記宛，FAX又はE-Mailでお願いします
飼料用アミノ酸セミナー開催事務局
日本曹達株式会社基礎化学品事業部
飼料添加物グループ　菊池宛
FAX：03-3245-6277
メール：h.kikuchi@nippon-soda.co.jp

会員会社

味の素株式会社
日本曹達株式会社
協和発酵バイオ株式会社（平成20年10月より）